

連載

# バトル・グリーン

## VOL. 4

渡辺 由佳里



## ヘイトクライムの多面性

～前編～

3月上旬、私はNPFH※1 運営委員長からのEメールでレキシントン町の中心街で起こった次の事件を知った。

ある中国系の女性がランチタイムに歩道を歩いていたところ、見知らぬ男に人種を侮辱する言葉を投げかけられた。彼女が振り返って言い返したところ、男は彼女に唾を吐きかけ、地面に殴り倒した。もみ合っている男女を見た男性2人と女性1人が駆けつけて引き離すと、加害者は近くの建物に逃げ込んだ。警察は加害者を探し出して逮捕し、暴行と「ヘイトクライム」※2の容疑で逮捕した。

◇

私は、「これまで表面化していなかったアジア系住民への憎しみが噴出したのだろうか？」と不安になった。しかし、報告を読み進めるにつれてこれが単純な人種差別事件ではないことを悟り、ほっとすると同時に複雑な気分になった。

加害者はホームレスで、しかも精神障害の可能性があるということだった。もしそれが真実であれば、住民の感情を反映したヘイトクライムではないが、ニュースが広まるとホームレスや精神障害者への差別や偏見を増悪させ、新たなヘイトクライムが生まれるかもしれない。

数日後の「NPFH運営委員会」の会議でも、複数の委員が私と同様の懸念を口にしたのだが、出席した4人の中国系移民たちの態度はまったく異なるものだった。彼らには「人種差別」の側面しか見えないようなのである。

特に、香港出身のコニーさんの反応は極端だった。警察の説明が終わるやいなや、彼女は声を張り上げて誰ともなしに怒りをぶつけ始めた。

「なぜ被害者は自分の名前を伏せるの？被害者の彼女が先導して差別の実態を訴えるべきじゃないの！」彼女は、引き続き自分の受けた差別の数々を挙げ、この事件を反差別運動のきっかけにするべきだと主張した。

町や警察が何もなかったというならば、コニーさんの怒りも納得できる。だが、レキシントン町は次のように事件に速やかに対応しているのである。

まず「NPFH運営委員会」の特別組織「インシデント対策チーム」は、警察との連携で次の対策を取った。1) 被害者の許可を得たうえで、町の中国系移民の会に連絡を取り、被害者の支援を求めた。2) 住民に正しい情報を提供するために、被害者の意向により名前

を伏せて新聞報道を行った。3) 町の中国系アメリカ人会と多くの中国系移民が属しているバイブル教会に連絡を取り、「NPFH運営委員会」のミーティングへの参加を求めた。そして、次の対策を練るためのこの会議である。

これ以上何をすべきだと言うのだろうか？

◇

出席者を見渡すと、みな礼儀正しく拝聴しているが居心地悪そうな表情を浮かべている。

実は、コニーさんは数ヶ月前に突然「NPFH運営委員会」の会議の席に現れ、山積みの議題を無視して自分が差別を受けた体験を一方的に訴え続けた人物なのである。その日彼女は、アーリントン町の公園では白人の年配の女性に、レキシントン町の小学校と中学校では生徒から差別的な扱いを受け、それを訴えた校長や警察からも邪険にされたと訴えた。だが、その一方で「レキシントンには労働者階級が少なく知識層が多いから他の町よりもまし」と平然とやってのけ、同席していた行政委員の1人が苦笑しつつ「これから私は労働者階級の仕事に出かけなくちゃならないんでお先に失礼します」と逃げ出したくらいである。

テーブルを見渡すと、この日も常連の委員たちは一様に複雑な表情を見せている。

コニーさんが「アメリカでは黒人公民権運動で得た人権があるのよ！アジア人だから何をやってもおとなしくがまんすると思わせていることはないわ」と声を上げると、長年のメンバーで黒人のチャックさんがついに席を離れた。祖父が奴隷だったという彼にとって、公民権運動とこの事件を同等に扱われるのは我慢できなかったのではないだろうか。

アジア人のひとりとしていたたまれない気分になった私は、コニーさんを遮ってこう言った。

「これは住民の偏見を反映したヘイトクライムではありません。警察も町も速やかに対応しています。状況を改善するためにわれわれが何をできるのか、具体的な提案をするほうが効率的だと思うのですが」

けれども、私がおもったのは、アジア系移民の利己主義への歯がゆさである。

NPFH運営委員長がこれまで何度誘っても、中国系移民の会の代表者は、学校での特殊教育児童に対する差別、同性愛者に対する宗教グループの圧力、高齢者と若年層を繋ぐプログラム、多宗教が連携するプログラムなどを語り合う会議には参加してくれなかったのである。

私がこのとき予想したとおり、議題が異なる翌月の会議ではこの会に参加した4人は姿を見せなかった。(次号につづく)

※1 No Place For Hateの略。「人々の違いの真価を認め、偏見や差別がないコミュニティを促進する」ことを目標に「Anti-Defamation League」が「The Massachusetts Municipal Association」との提携で1999年に始めたキャンペーンのこと。当初NPFHコミュニティ宣言をしたのはマサチューセッツのわずかな市町にすぎなかったが、現在は全米に広がっている。「バトルグリーンVol.2」(『たからまがじん』2007年5月号掲載)をご参照ください。

※2 ヘイトクライム(Hate crime、あるいはBias crime)とは、ある人種、宗教、性愛の有様など異なる「集団に対する偏見・差別・蔑視」感情などが元で起こされる犯罪行為、とくに暴行、脅迫、殺人などの暴力犯罪を指す。(ウィキペディア)

※文中の登場人物は例外を除いて全て仮名です。



わたなべ ゆかり・一九六〇年兵庫県生まれ、京都大学医療技術短期大学部卒、同大学部専攻科修了。京都大学医学部付属病院に三年間勤務。その後ロンドン留学、日本語学校のコーディネーター、医療製品製造会社勤務などを経験。二〇〇一年「アーティアー」で第七回小説新潮長篇新人賞を受賞。二〇〇三年、二作目『神たちの誤謬』を発表。現在はボストン郊外レキシントン市で夫と娘の三人暮らし。翻訳やエッセイ執筆の日々を送る。